

【無責任な「安全」・「安心」の言葉の乱用の怖さを考える】

顧問 野口 雄司

新型コロナウイルス感染症は、日本においても感染拡大し、緊急事態宣言を発出するに至り、医療提供体制に多大なる影響を及ぼしている。

業界では医療機器の設置や保守サービスを安全に、安定的に医療機関へ届けるため、今般、医療機関訪問時の感染防止策を纏めた「新型コロナウイルス感染予防ガイドラン JIRA 業界版（第1版）」をワーキンググループにてまとめ、本年度3月公表するにいたった。

この一年半近く医療関連事業者の顧問として、また工業会活動での感染対策の委員として活動してきた中で特に気になる内容を整理してみることにする。

最近では様々な場面で「安全」「安心」という言葉が安易に乱用・使用されているが、全くその言葉の重みは無く、無責任な感覚を与えているのが現状であり、むしろ対極にある「危険」「不安」という状況を作り出しているのが現状である。

以前にも記したが、「安全」「安心」は近年ペアにして用いられる機会が多いが、両者は深い関係にあるものの、本質的にはかなり異なった面を有している。

「安全」は、科学技術、社会技術の問題として論理的に、客観的に、数量的に評価される試みが行われている。リスクという概念が用いられ始めたのは、このためと考えられる。

「安全」は科学技術や社会技術として実現させることを通して、客観性を重んじる方向を目指して発展してきた。しかし、「安全」の定義にリスクの概念が用いられ、リスクには危害のひどさという主観的な面が含まれており、また、「安全」目標には価値観が含まれているので、「安全」をすべて客観的に、技術的に取り扱うことは困難である。

一方、「安心」は主観的に判断され、個人によって大きく異なる。人間の心理に深く根ざしている

「安心」は、「信頼する」という人間の心と強く関係している。「安全」の反対は『危険』であるが、「安心」の反対概念は、『心配』、ないしは『不安』であろう。「安全」であることは『安心』に大きく貢献するはずであるが、「安全」であっても「安心」できない例、逆に「安心」しているが実は「安全」でない例もあり、必ずしも一致しない。

「安全」に慣れて「安心」してしまうと、かえって『危険』になるという面があるので、常に「安心」してはいけないということを強調する人もいる。小さな『危険』の経験が大きな『危険』を避けることに繋がるという主張にも似ている。「安全」と「安心」は客観と主観の狭間にあるといえる。

昨年の新型コロナ感染症が発生時、当該事項に関する正しい知識・認識は平準化されているかは疑問であった。

なりよりも、組織を預かる者として、今我々一人一人がどのような状況にあるかを知ることが必要であった。

多くの人が現状を「危険」と感じ「不安」を感じている事だといえる。言い換えれば「安全」なのか「安心」なのか、判断がつかない状況にある事だった。

そこで「安全」・「安心」を実現するためには、どのような要素が存在し何が必要なのか？を整理した。

その上で個々の内容を整理することにより、組織内での対応の手順・意識づけの平準化を行った。そして市場状況の変化や市場動向の予測を加味することにより、企業という組織体の新たな体制作りを行うに至った。

もちろん前提としては以前図で紹介した、「安全」・「危険」と「安心」・「不安」の構成要素領域を記し今回の心理的要素がどのように構成されているかを説明した。

しかしながら現在に至るまで、中身の無い安易な言葉の羅列により各自の不安や、組織としての方向性に影響を及ぼすことになっており、むしろ当時懸念していた時間経過と共に、新たに「不信感」や「焦燥感」を増大させ、社会・経済的活動の萎縮を加速するという状態を作り出し、新たに生じた様々な格差は社会不安の助長が醸成され社会崩壊への危険性の危惧も指摘され始めている。

改めて指導者たる者は「言葉」の持つ意味と関係性を理解しその影響を的確に説明する義務と責任がある。根拠なき無責任な「言葉」の乱用は決して許されるものではない。